

2018年1月28日聖学院教会聖日礼拝説教

「わたしたちのなすべき礼拝」
ローマの信徒への手紙 12：1-8

菊地 順

パウロは、今日の聖書箇所、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」と語っています。おそらくパウロは、エルサレム神殿でなされていた犠牲を捧げる祭儀を思い浮かべながら、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」と語ったのだと思います。犠牲を捧げるということは、イスラエル宗教にとっては重要なことでした。その詳細は、レビ記に記されていますが、レビ記の冒頭では、次のように語られています。「主は臨在の幕屋から、モーセを呼んで仰せになった。イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。あなたがたのうちのだれかが、家畜の献げ物を主にささげるときは、牛、または羊を献げ物としなさい。／牛を焼き尽くす献げ物とする場合には、無傷の雄をささげる。奉納者は主に受け入れられるよう、臨在の幕屋の入り口にそれを引いて行き、手を献げ物とする牛の頭に置くと、それは、その人の罪を贖う儀式を行うものとして受け容れられる」。

犠牲のいけにえは「人の罪を贖う」ものとして捧げられました。そして、それは、無傷の全きものでなければならなかったのです。それが、神に献げる正しい礼拝であったのです。パウロは、それと同じように、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」と語るのです。それは、もちろん、比喩的な言い方です。実際に、自分の体を祭壇に差し出すわけではありません。しかし、イエス・キリストが、十字架上で、自らを犠牲の子羊として神に献げ、わたしたちの贖いの救いとなって下さったように、わたしたちも、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」と語るのです。そしてまた、「これこそ、あなたがたのなすべき礼拝」とであると語るのです。

ただ、ここで語られている「礼拝」というのは、狭い意味での「礼拝」ではありません。これの元々の言葉 (*latreia*) は、「仕えること」という意味です。それは、宗教用語であって、「神に仕えること」を意味します。英語で言いますと、**service** という言葉です。確かに、**service** という言葉にも礼拝という意味がありますが、それは **worship** という言葉よりはもっと広い意味を持っています。ですから、今日の聖書箇所に出て来る「礼拝」という言葉は、今わたしたちが守っているこの礼拝のことを想像しますと、少し誤解を生むかもしれません。

それは、何よりも、神に仕えることなのです。

ところで、このパウロの言葉に関連して、もう一点、注目したいことがあります。それは「なすべき礼拝」と言われているところの「なすべき」という言葉です。口語訳聖書では、このところは、「霊的な礼拝」と意識されていました。それが、新共同訳聖書では「なすべき礼拝」となっています。だいぶトーンが下がった感じがします。しかし、これも、元々の言葉からすると、「なすべき礼拝」との訳が正しく、またふさわしいと言えます。その「なすべき」と訳されている言葉は、**logikos** という言葉で、これは「ロゴス」という言葉の形容詞です。ロゴスとは、ご存じのように、「言葉」という意味で、そこから「議論」とか「理法」とか「理性」という意味も含まれます。ですから、ここでは「理性的な」という意味が当てはまります。パウロは、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたの「理性的な礼拝」「理性に適った・神に仕えること」であると語ったのです。それを、新共同訳聖書は「なすべき礼拝」と訳した訳ですが、それは理性に合致したふさわしい礼拝という意味なのです。

おそらく、こうした話を聞きますと、皆さんの中には、違和感を覚える方もおられるかも知れません。理性と信仰は違うのではないか、それは相容れないものではないのか、そういう疑問すら持たれるかもしれません。確かに、キリスト教の歴史には、そうした議論があることも確かです。また、18世紀の啓蒙主義以降、いわゆる理性主義の時代を迎えて、信仰がしばしば反理性的なものとして退けられ、社会の片隅に押し寄せられてきたのも確かです。しかし、そうした背景の一因には、理性自体が縮小化してきた現実があるとも言えます。現在、理性といえば、科学的理性とか技術的理性といったものが前面に出ています。いわゆる科学に代表される理性に注目が集まり、それこそが理性を代表するものであるかのように見なされています。しかし、理性とは、元々は、科学的なものに限定されたものではなく、それを遥かに超えて、永遠をも語り得るものでもあったのです。古代の哲学者たちは科学について語っただけではなく、神についても語ったのです。そして、神に対して理性的であることは、神に対して人間が取るべきふさわしい態度でもあったのです。そして、それは、パウロの時代においても、同様でした。ですから、パウロが、「理性的な礼拝」について語ることは、決して奇異なことではなく、むしろごく自然のことであったと言えます。

ところで、今日の聖書箇所は、12章の1節から8節と、さほど長い箇所ではありませんが、この中に、この理性的な態度が、ところどころに垣間見られるように思います。まず、2節では、「あなたがたはこの世に倣ってはなりません」と語られています。この箇所は、口語訳聖書では、「あなたがたは、この世と妥

協してはならない」と訳されていて、それに親しんでいる人もおられるかと思えます。ただ、この箇所も、元々の言葉から直訳すると、「自分自身をこの世に合わせて形づくることをしてならない」という意味で、そこにはこの世と「妥協する」といった意味はまったくありません。むしろ、新共同訳のように、「この世に倣ってはなりません」というのが正しい訳なのです。ただ問題は、次の言葉です。パウロは、この戒めに続けて、その具体的な対応策を語る訳ですが、そこには次のように記されています。「むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」と語られています。まず、「心を新たにして自分を変えていただき」と訳されています。これを読むと、「自分が心を新しくすることによって、神によって自分を変えてもらう」といった意味が読み取れますが、ここも元々の言葉に立ち帰ると、「心」と訳されているのは「ヌース」(nous)という言葉で、これは普通「理性」とか「精神」と訳される言葉です。先ほどのロゴスとは異なりますが、それに近い意味の言葉なのです。ですから、このパウロの言葉は、「心を新たにし」ではなく、「理性を」あるいは「精神を新たにし」、そして「自分を作り変えなさい」という意味なのです。そしてまた、そのようにして、「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかを」「検証しなさい」と言うのです。そうした理性的な態度、理性的な取り組みが、神に献げるにふさわしい、それこそ「理性的な礼拝」だと言うのです。

さらにパウロは、3節でも、「自分を過大に評価してはなりません」と語ります。これは、元々の意味は、「思うべきことを超えて思ってはならない」という意味です。ですから、ここには、自分を過大に評価する云々といった話は全くありません。ただ、「思うべきことを超えて思ってはならない」とパウロは語るのです。それは、節度をわきまえた、理性的自制を求める言葉であるとも言えます。そして、それは次の言葉にも繋がっています。パウロは、こう語っています。「むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」。パウロは、「慎み深く評価すべきです」と語るのです。それは、元々は「正しく思う」といった意味の言葉ですが、そこには人間の分際を超えてはならないという意味が含まれている言葉だと言われています。すなわち、人間の分際をしっかりとわきまえた中で、思い、考え、評価すべきだと言うのです。そして、それもまた、節度をわきまえた、理性的な態度であるとも言えます。パウロは、それを、神にふさわしい態度として、人々に求めているのです。

ところで、パウロはその理由を、4節以下で、教会の姿を思い起こしながら、次のように語っています。「というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分か

ら成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」。パウロは、わたしたち一人ひとは、一つの体を作る部分であると語ります。しかも、その部分、部分の働きは、それぞれが異なり、またそれぞれが互いに対してその部分となり、全体を形づくっているというのです。ですから、パウロは、一人ひとりがただ単に全体の部分だから「慎み深く評価すべきです」というのではないのです。むしろ、それぞれの部分が全体にとってかけがえのない存在であるから、「慎み深く評価すべきです」と語るのです。すなわち、事柄を見極め、評価すべきことは評価し、正しく判断すべきことを求めているのです。

それでは、その掛け替えのない賜物とは何でしょうか。パウロは、こう語っています。「わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい」。ここでパウロが挙げているのは、預言する人、奉仕する人、教える人、勧める人、施しをする人、指導する人たちです。それは、キリストの体の部分として、キリストに仕える一枝一枝のことです。パウロは、それは賜物として与えられたものだと言います。そして、各自に与えられたその賜物を、いわば十二分に発揮して、キリストに仕えなさいと語るのです。すなわち、「預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい」と語るのです。また「教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい」と語ります。そして、「施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい」と語るのです。パウロは、「専念しなさい」、「精を出しなさい」、「惜しまず」、「熱心に」、「快く」行いなさいと語るのです。そして、それが、今日の聖書箇所初めで勧められている「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」ということなのです。

このように、パウロは、決してがむしゃらに神に仕えなさいと言うのではないのです。むしろ、「あなたがたのなすべき礼拝」、すなわち「理性に適った礼拝」を献げなさいというのです。理性に適った仕方で神に仕えなさいと語るのです。このこととの関連で思い起こされるのは、パウロが、伝道者を競技場で走るスポーツ選手にたとえた話ではないでしょうか。パウロは、コリントの信徒への手紙一の9章で、こう語っています。「競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするの

ですが、わたしたちは朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません」と語っています。パウロは、「やみくもに走ったり」、「空を打つような拳闘はしない」と語るのです。「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか」、それを理性的に検証して行くとき、そこには、そうした過ちは起こらないのです。逆に、そうした検証を怠り、気分やまわりの状況に押し流されていくとき、そこには「やみくもに走ったり」、「空を打つような拳闘」が起こってくるのです。そして、それは、キリストの体なる教会に混乱をもたらし、終には分裂といった悲劇さえもたらすのです。

また、わたしたちは、パウロがいわゆる「異言」を控えるよう勧めていることも思い起こすべきです。パウロは、同じコリントの信徒への手紙一の14章で、「異言を語る者は、人に向かってではなく、神に向かって語っています。それはだれにも分かりません」(2節)と語り、異言の問題点を指摘しています。そして、人に分からないことであれば、異言がどれほど優れたものであるとしても、それは教会を建てることにはならないと語るのです。また、自分自身に関しても、「わたしが異言で祈る場合、それはわたしの霊が祈っているのですが、理性は実を結びません」(14節)と語っています。自分で異言を語るときも、自分の理性はそれを理解できないというのです。そこで、「では、どうしたらよいのでしょうか」と自問し、こう答えています。「霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう」(16節)。霊で祈り、霊で賛美するとき、それはどれほどすばらしい祈り、賛美であっても、理性には分からないのです。だからパウロは、同時に、理性でも祈り、理性でも賛美しようと言うのです。そうした理性的取り組みが、不可欠だと言うのです。それは、そうした理性的取り組みこそが、人々に祈りと賛美を共有する道を開くからなのです。おそらく、そうした理性的取り組みがなければ、教会が理解するところも、目指すべきところも、次第に曖昧になっていき、終には立ち行くことができなくなってしまわないのでしょうか。

わたしたちが属するプロテスタント教会は、聖書主義に立つキリスト教です。それは、聖書を神の言葉と信じ、その言葉に神の啓示を見ている教会です。それはまた、言葉に立つゆえに理性に立つ教会であるとも言えます。そして、理性は、決して信仰に反するものではなく、かえって信仰を強め、それを側面から支えるものでもあるのです。その意味でも、信仰は理性を必要とするのです。そして、わたしたちが信仰と共に理性を以て神に関わるとき、それは信仰をより明確にし、より豊かにしていくのです。

現代は、しばしば反知性主義の時代だと言われています。それは、いわゆる知的権威やエリート主義に反発する中で生まれてきた風潮で、きちんとしたデ

一タや証明や思考に基づくのではなく、肉体的な感覚や日常的な感情で物事を判断する風潮のことです。そうした反知性主義がトランプ政権誕生の背景にもあったなどと言われていています。しかし、そういった風潮は、非常に危険であると言えます。大地に根ざすしっかりとした根がないため、ちょっとした要因で大きく変動する危険が非常に高いからです。そして、何よりも大きな問題は、そういった風潮からは、真実のものは生まれてこないからです。

むしろ、こうした時代こそ、わたしたちは、改めて、「何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるか」を絶えず検証し、理性的に捉え直していかなければならないのです。そして、それぞれが神から与えられている賜物を生かして用いていくなかで、全体としてのキリストの体に仕えて行くのです。すなわち、霊で祈りつつ理性でも祈り、霊で賛美しつつ理性でも賛美しながら、わたしたちの「なすべき礼拝」、神に仕える理性的な歩みを、絶えず求めつつ、共々に、キリストの体なる教会に仕えて行きたいと思えます。